

国語プリント No. ( )

年 組 番 名前

配布日 月 日 曜

## 山月記 虎の象徴を読み解く 第4段落

P27 L14 ～ P29 L15

★ここで李徴が詠んだ漢詩をふりかえってみよう。

漢詩の対比は「上 対 下」「や」「で、  
李徴は「下・（ ）」「側にある自分を（ ）」していた。

ところが、この小説ではその立場が逆転している部分がある。（李徴が望むか望まないかは別として。）

○第4段落でこの立場が**逆転**している表現を探してみよう。↓象徴

○P29 L11 「山も木も月も露も、一匹の虎が怒り狂って、哮っているとしたか考えない。」  
○この表現の裏をよむと、本当は「一匹の虎が怒り狂って、哮って」いるのではなく、

が

いる。

○人間だったとき、李徴が詩で名を成すことをやめた理由は何か？

○虎である今、李徴は人生で始めて**上**に立つことができたが、人間であるときと虎であるとき  
の大きな違いは何か？

○第3段落で、李徴がかつて作った詩を暗唱したのを聞いた後、袁傚はP26 L8 「しかし、このままでは、**第一流の作品となるのには、どこか（非常に微妙な点において）欠けるところがあるのではな**  
**いか、と。**」と感じている。つまり「非常に微妙な点」において詩で名を成す（周りを圧倒す  
る）ことはできなかった。

しかし、第4段落では周りを圧倒することができている。この点から考えると「非常に微妙な点」は何だったと考えられるか。辻褄を合わせてみよう。（書かれていないところを読んでみよう。）